

くつおとてんじん  
沓音天神 (観音寺町)

今から四五〇年ほど昔、俳諧の祖といわれた山崎宗鑑が、西国に行脚して興昌寺山のふもとに「一夜庵」を結んで、簡素な暮らしをしていたときのことである。

春のある日、一人の童子が宗鑑を訪れ、俳句を書いてほしいと頼んだ。そこで宗鑑は童子に、「満円久出天母長幾春日哉」という句を書いて渡した。童子は感嘆して、この句を懐に入れて帰った。

翌日、梅の一枝を捧げ持つて、再び句を求めてやってきた。そこで、「蒔きそめし種や一粒万ばい花」という句を与えると、童子は喜んで

「わたくしはこの句で一会を催したいので、どうかお手伝いくださいませんか。」

と申し出たが宗鑑は答えなかった。童子は、

「それではあなたは、一日だけ字を書くことをやめていてほしい。」

と申し出たので、宗鑑はこれを許した。

あくる日、また童子が来て、一枚の書を差しだした。宗鑑が見ると、その書は自分が書いたものと少しも変わらなかった。

そこで宗鑑が童子に、

「実は昨日試しに筆をとったが、手が自由にならなかった。この書は自分の書と少しも変わらないがどうしたことか。」  
と尋ねたが、童子は笑ってそれには答えず、

「あなたは今より更に字が上手になるでしょう。あなたの筆跡を好む家は、必ず火難から守られるでしょう。」

と言って立ち去った。宗鑑は不思議に思つてあとを追つていったが、姿は見えないで杳音だけが聞こえてくる。それを頼りに進むと神恵院境内に祭られている天神社でその杳音は消えた。これ以来この天神社を杳音天神というようになった。この天神社は今も山門近くに  
ある。

（「観音寺市誌」より）

